

類別語彙 2 拍名詞が後部要素となった場合の 複合名詞アクセントについて 一和田論文と前田論文を杉藤 CD-ROM 辞典で比較検討する一

村 中 淑 子

1 はじめに

京阪式アクセントにおける複合名詞アクセントの性質については、次のことがすでに知られている^[注1]。すなわち、(a) 後部要素が何であるかによって複合名詞の「アクセント核の有無および位置」が決定する、(b) 前部要素が高起式か低起式かにより、複合名詞全体の「起式」が決定する。この2点については、和田実1942、前田勇1953をはじめとした諸論文でいわば証明済みであり、例外があるとしても基本的には問題がないといつてよいであろう。ところが、同じ和田の論文であるが、和田1943には、この(a)の内容を限定するような仮説が述べられている。すなわち、「後部要素が何であるか」ではなく、「後部要素のアクセント」によって複合名詞のアクセントが決まる、というのである。詳しくは、類別語彙 2 拍名詞が後部要素となった場合の複合名詞のアクセントは、もとの類別によって決まる、というのである^[注2]。しかし、これは、前田1953における調査結果の内容と矛盾するように見える。前田1953をみると、後部要素にどの類の2拍名詞が来ても、複合名詞となった場合のアクセントはそれぞれ3系列に分かれる。つまり、類別と複合名詞アクセントとの間には対応関係がない、と解釈できる結果が出ているのである。この2つの論文の間の矛盾はどうして起こったのか、どちらが正しいのか。

注1 本稿で述べている複合名詞アクセントの性質は京阪式アクセントにおけるものであるが、佐藤1989等で記述されているように、東京アクセントにも共通して当てはまる部分がある。すなわち、(a) 後部要素が何であるかによって複合名詞の「アクセント核の有無および位置」が決定する、という点は共通である。また、同じ後部要素であるのに複合名詞のアクセントが一通りでない場合の条件についても、京阪式アクセントと東京アクセントとで重なる部分が多い。さらに、複合名詞の後部要素のアクセントがかなり一致することについては上野1997で強調されている。和田1943においては、その一部が類別語彙と対応すると述べられている訳である。

注2 この和田の仮説については、松森1993・1998で取り上げられているが、今までなぜかあまり顧みられることがなかったように思われる。たとえば、上野1997では、京都方言で後部要素が2拍の場合、複合名詞のアクセントがどれになるかは後部要素のアクセントからは「予測できず、単語ごとに個別の指定が必要である」と述べている。佐藤1989では、東京アクセントにおいて「平板型と尾高型の二モーラ語は後続して複合語を作る際、頭高型に変わることはないなどの制限はありそうである」「頭高型の語はすべて保存型の特性を示すわけではなく」などの記述があり、後部要素のもとのアクセントと複合名詞アクセントとの間にある程度の関連性は認めつつも、「自立語のアクセントから結合アクセントの型を一義的に決めることはむずかしい」と述べている。

矛盾の理由としてまず考えられるのは、扱っている複合名詞の「前部要素の拍数」が異なることである。和田1942では前部要素がすべて3拍以上であり、前田1953ではすべて2拍である。後部要素が同一であっても、前部要素の長さが2拍以下であるか3拍以上であるかによって複合名詞のアクセントが異なる場合が多いのは、村中1998 a、1998 bで見たとおりである^{注3}。和田1943でも「出来上った全体の複合名詞で音節の数が五音節以上にならないと、三音節や四音節では今のやうに規則的に行かないものが割に出て来ます」とある。よって、先の問題を解決するためには、同一の資料を用いて、前部要素の長さが3拍以上の場合と2拍の場合との両方について、調べる必要がある。

矛盾の理由として、もうひとつ可能性があるのは、「話者の属性」が異なっていることである。ここで詳しく検討してみよう。前田の話者は昭和24年（1949年）当時の師範学校生徒3人である（生まれ年は明記されていないがおそらく1928年～1932年あたりであろう）。男性2人、女性1人でいずれも大阪市内に生まれ育った話者である。一方、和田の話者の属性は明記されていない。おそらく和田自身（1919年兵庫生まれ）の内省に周囲への観察結果を加えたものではないかと考えられる。つまり、出身が大阪であるか兵庫であるかの違い、および、生まれ年の違い、という属性の違いによって結果の違いが生じた可能性がある。しかし、大阪と兵庫（神戸）のアクセントは、部分的な違いがあるとしてもごく小規模なものであり、類別語彙と複合名詞アクセントとの対応関係があるかないかといったような、体系全体にかかわるような問題において、違いが生じるとは思われない。和田1943において「近畿の中央部、京都・大阪・神戸の三大都市附近の、いはゆる近畿の主流アクセントを取り扱います」とまとめて扱っているのは、妥当であると思われる。また、生まれ年の違いについては、それがたとえ10年程度であってもアクセントの違いの要因となることはありうるが（たとえば村中・田原1998で扱っている大阪の4類・5類のアクセント変化）、1919年と1930年前後の間の10年の違いでは、言語外的要因として大きなものがあるとも考えにくい（たとえばテレビの普及といったようなものがない）。よって、話者の属性という点については、和田1943と前田1953の間に大きな違いはなく、むしろ同列に扱ってよいのではないかと考えられる。

本稿では、和田1943と前田1953の間に見られる矛盾を解決すべく、杉藤美代子1995「大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM」（以下、杉藤 CD-ROM 辞典と呼ぶ）を資料として用い、検討を行なう。杉藤 CD-ROM 辞典の高年層話者3人はいずれも大阪市内の生え抜きであり、生まれ年は各々1932年、1923年、1916年である。和田、前田との比較検討にじゅうぶん耐えうるとおもわれる。

注3 村中1998 a、1998 bはいずれも杉藤1995を資料とした複合名詞アクセントの分析である。村中1998 aでは、後部要素が2・3・4・5拍の外来語である複合名詞を扱っている。村中1998 bでは、後部要素が2拍の漢語を36、および2拍の和語を17（腰、先、時、店、笛、袖、小屋、水、色、飯、貝、板、汁、粒、蛇、桶、雨）、合わせて53の後部要素を対象として扱っている。本稿の第4節における分析は、1998 bで扱った和語に類別語彙を少し足したものである。

以下、次節から順に、和田1943、前田1953のそれぞれの要点をあらためて示した後、杉藤CD-ROM 辞典による結果を示し、検討する。なお、ここでは高起・低起には注目せず、複合名詞のアクセント核の位置と有無のみを見ていく。

2 和田1943の仮説について

まず、2拍名詞が後部要素となった場合の複合名詞のアクセントは3種類に分類できるという記述があるが、これは前田1953とも共通しており、また後部要素が和語・漢語・外来語いずれであってもあてはまることである（稀にこの3種以外のものもある）。この部分に関しては、すでに定説といってよいだろう。3種類とは次の通り。

- ・アクセント核がない（本稿では「平板化」と呼ぶ）
- ・後部要素の直前にアクセント核がある（本稿では「プレアクセント」と呼ぶ）
- ・後部要素の1拍目にアクセント核がある（本稿では①と呼ぶ）

そして、類別語彙2拍名詞が後部要素となった場合の複合名詞のアクセントは、もとの類別によって決まる、という仮説が立てられている。すなわち、近畿中央部アクセントにおいては、次の関係が成り立つのではないかという^{注4}。

後部要素の2拍名詞のアクセント	複合名詞のアクセント
1 類・2 類	プレアクセント
3 類	平板化
4 類・5 類	①

（ただし和田は、プレアクセント、平板化、①ではなく、甲、乙、丙と呼んでいる）。

和田が複合名詞の具体例を挙げて検討している後部要素は、1類は「牛」、2類は「石」、3類は「犬」、4類は「笠」、5類は「雨」である。和田は「たった一語づつを各類の代表として申上げただけですから、いつもの語もかうなるといふわけではございません。例外はあります。」と述べ、「これは本當にまだ一つの假説にすぎないものでございまして、なほよく研究してみないとわかりません」と述べている。しかし「例外が種々の事情から生ずるに致しましても、原則としては、かうなるのではないかと考へるものでありまして」ともある。

和田自身がいうように、一語ずつしか例が挙げられていないというのは問題であろう。その他の語についても検討はなされたのであろうが、明らかにされていない。

3 前田1953の調査結果について

2拍名詞プラス2拍名詞で4拍の複合名詞となる場合の調査結果が示されている。表にまとめると次のようになる。話者については「はじめに」で述べた通りである。

注4 和田はこの仮説から、京都アクセントにおいて単独発言では約600年前にすでに失われた2類と3類の区別が、複合名詞のアクセントのなかに残っているのではないかという。

後部要素の2拍名詞のアクセント				複合名詞の アクセント
1 類担当	2・3 類担当	4 類担当	5 類担当	
水類 (25)	貝類 (11)	粒類 (12)	鮭類 (2)	プレアクセント
小屋類 (55)	色類 (96)	板類 (24)	蛇類 (16)	平板化
笛類 (14)	飯類 (22)	汁類 (5)	桶類 (9)	①

水類、小屋類、等は前田の用語である。括弧内の数字は、各々の類に含まれるものとして前田が挙げている語の数である^{注5}。また、前田は、1 類、2・3 類、4 類、5 類をそれぞれ揚式（あげしき）全高型、揚式一高型、抑式（おさえしき）弱尾高型、抑式強尾高型、と呼んでいる。

表を見てもわかるように、後部要素にどの類別2拍名詞が来ても、複合名詞となった場合のアクセントはそれぞれ3系列に分かれる^{注6}。すなわち、前田1953においては、類別語彙2拍名詞と複合名詞アクセントとの間には対応関係がない、という結果が出ていることになる。

4 杉藤 CD-ROM 辞典からのデータを用いた検討

和田1943、前田1953との比較検討を行うため、杉藤 CD-ROM 辞典を用いる。この辞典は大阪市生え抜きの話者6人（高年層3人と若年層3人）によって発音された、65928語についてのアクセント情報を、CD-ROM の中に納めたものである。ここでは比較のため、高年層3人（1932年生まれ男性、1923年生まれ男性、1916年生まれ女性）の発音結果の資料を用いる。

村中1998bと同じ方法で必要なデータを取り出した。すなわち、後部要素を同じくする複合名詞をまとめて取り出すため後方一致検索をかけ、一覧表の形式で印刷し、アクセント核の位置が同じと解釈できるものごとに数を数えて、表を作成した。

今回調べた複合名詞の後部要素は、次のとおりである。

- 1 類 腰、先、笛、袖、小屋、水、牛
- 2 類 歌、雪、蝉、紙、石
- 3 類 時、店、色、貝、髪、草、花、馬、犬
- 4 類 板、汁、粒、針、糸、船、笠、傘
- 5 類 蛇、桶、雨、声、窓、蜘蛛、猿

これらを選んだ基準は、次の3つである。すなわち、(1)和田の挙げている語をすべて入

注5 前田1953で複合名詞の後部要素として扱われているもののなかには、いわゆる類別語彙ではないものも若干混じっているが、ここではそれについては触れないことにする。

注6 前田1953の結果では、後部要素のアクセントにかかわらず、複合名詞になった場合のアクセントが「平板化」となるものが全体に多いが、これは前部要素がすべて2拍であるためと考えられる。村中1998bの結果でも、前部要素が2拍（後部要素も2拍）の場合に「平板化」となるものが非常に多かった。

れた、(2)前田の分類からできるだけ網羅的に選んだ（ただし前田が2・3類をまとめているため、2類3類それぞれのなかで数に偏りがある）、(3)複合名詞を作りやすそうなものを選んだ。

取り出したデータをまとめると次の表のようになる^{注7、注8}。

【1類】

	前部要素が2拍（前田との比較）				前部要素が3拍以上（和田との比較）			
	ブレ	平	①	その他	ブレ	平	①	その他
水	64	11			39			
先	14	99	7		39	14	1	
小屋		30			2	19	3	
袖		23		1	6			
牛	13	2						
笛	3	23	13		2		1	
腰	19	14			20	4		

【2類】

	前部要素が2拍（前田との比較）				前部要素が3拍以上（和田との比較）			
	ブレ	平	①	その他	ブレ	平	①	その他
歌	7	35			48			
石	4	44			39			
紙	2	37	57		21	1	62	
雪	15	17	1		21			
蟬		11	1		6		3	

注7 前田1953において、複合名詞になったときのアクセントが「人により、また語により相異を示したために所属を断定しがたいもの」の例として「牛」「笛」「粒」を含む17語が挙げられており、それらの分類は「多きに從ったのである」ということである。

注8 前田1953において「先」は「先端の意」（単独で高起平板）と「最初の意」（単独で頭高）との2つに分けてあるが、ここでは「先端の意」のほうで表を作っている。

【3類】

	前部要素が2拍（前田との比較）				前部要素が3拍以上（和田との比較）			
	ブレ	平	①	その他	ブレ	平	①	その他
時	19	9	2		24			
貝	36	2		1	39			
髪		15	9		21	1	26	
草		9			51			
花		42			15	9		
馬		60			11	1		
犬		36			3			
店		21			2	4		
色		149			1	154		1
飯	1	23	42		5		19	

【4類】

	前部要素が2拍（前田との比較）				前部要素が3拍以上（和田との比較）			
	ブレ	平	①	その他	ブレ	平	①	その他
粒	25	4	1		3			
笠	10	5			15			
傘	5	9	1		11		1	
板	3	93			38	4	3	
糸	4	82	1		21			
船	1	29	9		28		20	
汁		8	7		3		24	
針	10	4	16		4	1	13	

【5類】

	前部要素が2拍（前田との比較）				前部要素が3拍以上（和田との比較）			
	ブレ	平	①	その他	ブレ	平	①	その他
雨	8	9	1		17		1	
蛇		12			11		1	
窓	1	24	2		11		22	
蜘蛛		6			6		3	
桶		17	4		6		3	
猿		3			1		14	
声	11	5	41		19		47	

表について。

表の中の数字の出し方は次のとおりである。1類の「水」の場合を例にとると、前部要素が2拍の複合名詞は杉藤 CD-ROM 辞典のなかに25語検索される（雨水、打ち水、大水など）。25語×高年層話者3人＝延べ75語の発音データのうち、プレアクセントのものが64個、平板化のものが11個、①のものはゼロ、であった。この個数が表の中の数字である（語彙的なゆれ、個人的なゆれを含む数字となる）。

表の中で網かけを付したセルは、前田調査の結果あるいは和田仮説によるとそのセルに数字が集まるはずの部分である。左半分で網がかかっているものがあるが、これは前田1953で調査対象となっていないものである。

「飯」は現代京阪アクセントで頭高型であるが、2類か3類か不明なので、3類の最後の部分に置いた。これは、前田調査で扱われた頭高の語で①になるもののうち、2類か3類かが明らかなものが「音、栗、鯛」の3つしかなく、これらを後部要素とする複合名詞が杉藤 CD-ROM 辞典に見い出せなかったため、やむを得ず「飯」を表に入れたのである。「小屋」は類別語彙に入っていないようだが1類相当と思われるので入れた。

「ブレ」「平」はそれぞれプレアクセント、平板化のことである。「その他」のアクセントは左半分の2つは頭高型、右半分の1つはウスモイロの3型である。

表の右半分にに基づき、まず、和田仮説についての検討をおこなう。若年層のデータも同様に示したが、ここで表に示したのは高年層3人分のデータだけである。分析の際に適宜、若年層のデータについても触れる。

1類・2類については、和田仮説がかなり当てはまっているが、例外もある。すなわち、

前部要素が3拍以上のものについては、たいていがブレアクセントになっている。例外は「小屋」であるが、これは1類相当と考えられるのだが類別語彙ではないために当てはまらない、という可能性も考えられなくはない。「先」もやや例外的で、ブレアクセントが多いのだが平板化もかなり見られる。この平板化は、高年層話者の一人（1932年生まれ男性）に偏って見られるもので、若年層3人を見るとほとんどすべて平板化になっており、元来ブレアクセントであったものが、平板化へと変化しつつあるという可能性が高い。2類の「紙」も例外で、ブレアクセントよりも①がずっと多い。これは若年層の発音をみると①が減ってブレアクセントが多くなっており、①が古い発音とみられるので、本当の例外である。

3類については、和田仮説はほとんど当てはまらない。平板化が多いものはここでは「色」および「店」のみであり、ほかの後部要素については、ブレアクセントの多いものがほとんどである。「店」（「花」においても少数）で高年層にみられる平板化が若年層でほとんどなくなっているので、元来多かったはずの平板化がわずかに残っていたという解釈もできなくはない。「色」については世代差はなく、若年層でも平板化がほとんどであるが、これは共通語アクセントとたまたま一致しているために廃れなかったのかとも思われる（「時」においては逆に若年層で平板化が現われてきている）。

4類・5類については、①の多いものもあるが、ブレアクセントの多いものが半数以上であり、和田仮説のとおりではない。しかし、表全体を見渡してみると、①が多いのは4類・5類である、ということではできそうである。つまり、4類・5類だからといって①になるとは限らないが、①になるのは4類・5類である可能性が高い、といってもいいかもしれない。ここで①が多くなっているのは4類の「汁」「針」（「船」も）、5類の「窓」「猿」「声」である。「汁」「針」「猿」「声」は若年層においても①が多い。共通語アクセントの影響の可能性は考えられる。「窓」における①の発音は、高年層話者の二人（1932年生まれ男性と1916年生まれ女性）に集中しており、「船」における①の発音は、高年層話者の一人（1932年生まれ男性）に集中している。個人差の可能性も考えられる。（「粒」「笠」においては逆に若年層で①が現われてきているが、共通語化である可能性もある）。

以上から導き出せる結論として、次のようなことがいえる。後部要素が2拍の名詞で、前部要素が3拍以上のものから成る複合名詞のアクセントに関しては、現在の大阪では、類別を超えた全体的傾向として、ブレアクセントとなるものが多い。複合名詞アクセントと後部要素の名詞の類別とのあいだには、緊密なつながりは見いだせない。ごくゆるやかなつながりとして、1類・2類・3類はブレアクセントになるものも多く、4類・5類はブレアクセントあるいは①になるものが多い。和田1943の仮説のように1類・2類、3類、4類・5類の3つにきれいに分かれるとはいえない。和田仮説が現在の大阪アクセントに当てはまらない理由については、いくつかの可能性が考えられる。ひとつは、和田仮説のもととなっているアクセントががややふいアクセントであり、それが現在の大阪の高年層にはかなり失われているという可能性、すなわち時代によるアクセント変化の可能性である。和田1943の中にも、コオモリガサが①からブレアクセントに「移つていかうとしてゐるのではないかと思はれる傾向が多少あつて」とあり、後部要素が4類の場合について、複合名詞アクセントの時代的变化のきざしを示唆している（しかし和田仮説と今回の結果で最も大きく食い違って

いる3類については、時代的变化にかかわるような記述を和田はおこなっていない)。もうひとつは、和田仮説が扱っていた後部要素の語数が少ないため、語彙的な差や個人的な差を含んだものになっていた、という可能性である。より妥当な結論を出すためには、扱う語数をさらに増やしたうえでの検討が必要であると思われる。

次に、前田調査の結果と今回の結果を比べるため、表の左半分をみていく。

全体的にみて、前田調査の結果と杉藤CD-ROM辞典のデータとは、かなりよく一致しているといえよう。部分的な食い違いはあるものの、杉藤CD-ROM辞典においても1類～5類の後部要素それぞれについて、前に2拍のものがついて複合名詞になった場合のアクセントは、プレアクセント、平板化、①、それぞれの多いものに分かれる^{注9)}。食い違っている部分については、個人差と時代的变化の可能性の両方が考えられる。個人差というのは、前田調査も杉藤CD-ROM辞典もいずれも話者が3人であることから、じゅうぶん生じうると思われる。時代的变化というのは、生年はほとんど同じくらいであっても、調査時期が約40年ほどずれており、調査時の年齢がそれだけ異なることから、生じうるのではないかと考えられる。二十歳前後の時と50代60代以上の高年層になってからとでは、複合名詞のアクセントに少しは違いが出る可能性もあろう。

さて次に、表の左半分と右半分とを見比べてみよう。

後部要素が2拍で前部要素が2拍の複合名詞アクセントと、後部要素が2拍で前部要素が3拍以上の複合名詞アクセントは、全体にみても一つ一つの後部要素ごとにみても、次のパターンが多い。

前部2拍	前部3拍以上
平板化	プレアクセント

このパターンでないものを次に挙げていく。

1類の「水、腰、牛^{注10)}」、3類の「時、貝」、4類の「粒、筍」が

プレアクセント	プレアクセント
---------	---------

(以下、上2つのセルは省略する。)

注9 松森1993の73ページに東京アクセントにおける現象として示されている、前部要素が2拍以下の複合名詞のアクセントはすべて平板化する、という傾向は、前田大阪調査の結果および杉藤CD-ROM辞典の高年層データにおいては、全体的傾向としてはみられるものの、当てはまらない語がかなりあるといえそうである。

注10 「牛」が後部要素である複合名詞の長いものが杉藤CD-ROM辞典の中からは検索できなかったのであるが、おそらく前部要素が長い場合、和田がいうようにプレアクセントになるものと思われるので、ここではこのパターンのものとして挙げておく。

1 類の「小屋」、3 類の「色」が^{注11}

平板化	平板化
-----	-----

2 類の「紙」、2・3 類の「飯」、4 類の「針」、5 類の「声」が

①	①
---	---

3 類の「髪」、4 類の「船、汁」、5 類の「窓、猿」が

平板化	①、あるいは プレアクセント
-----	-------------------

となる。

以上の結果からみても、複合名詞アクセントと後部要素の類別との関係は緊密でないと
いってよいだろう。

5 おわりに

以上、和田1943と前田1953を、杉藤 CD-ROM 辞典により比較検討した。

和田1943の仮説については、少なくとも現在の大阪アクセントには当てはまらないのでは
ないかという結論に達した。前田1953の調査結果については、多少のずれはあるものの、現
在の大阪アクセントにかなりよく一致することがわかった。

杉藤 CD-ROM 辞典については、膨大な数の語アクセントを収録したアクセント辞典であり、
検索もしやすい。このように他のデータと比較したり検証のために用いたりすることの有効
性はじゅうぶんあると考える。今後さらに扱う語数を増やすことで、より妥当な結論を出す
ようにすすめていきたいと思う。

注11 注10と同じく松森1993の73ページに「第3類の一部の語に限って、前部要素が長くても短くても常
に高平調を示すものがある」とある。しかし、少なくとも大阪アクセントにおいては、第3類の語に限っ
てそうなる、とはいえないのではないと思われる。

参考文献

- 上野善道1997「複合名詞からみた日本語諸方言のアクセント」
『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂
- 金田一春彦1974『国語アクセントの史的・研究 原理と方法』塙書房
- 金田一春彦・和田実1980「国語アクセント類別語彙表」
国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版の中のアクセントの項
- 郡史郎・杉藤美代子1989「大阪アクセントの世代差」『音声言語』Ⅲ
(近畿音声言語研究会)
- 佐藤大和1989「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」
『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院
- 杉藤美代子1995『大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM』丸善
- 前田勇1953「大阪アクセントの複合法則—四音節無活用語の場合—」
『近畿方言』19
- 松森晶子1993「日本語アクセントの祖体系再建の試み—いわゆる
『下降式アクセント』の成立に関する考察をもとにして—」『言語研究』103
- 松森晶子1998「日本語のアクセント」『日本語学』3月号
- 村中淑子1998a「外来語を後部要素とする複合名詞のアクセントについて」
『日本語研究センター報告』Vol. 5 (大阪樟蔭女子大学日本語研究センター)
- 村中淑子1998b「大阪市における複合名詞のアクセントについて
—『大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM』を用いて—」
1998年度日本音声学会全国大会予稿集
- 村中淑子・田原広史1998「大阪アクセントにおける2拍名詞4類・5類の統合の実態について」
国語学会平成10年度秋季大会要旨集
- 和田実1942「近畿アクセントに於ける名詞の複合形態」『音声学協会会報』71号
- 和田実1943「複合語アクセントの後部要素として見た二音節名詞」『方言研究』第七輯

付記

1998年9月27日の日本音声学会における口頭発表の際にいただいたコメントの一部に答えようと考えたことが本稿をまとめるきっかけになりました。白勢彩子氏、松森晶子氏、角道正佳氏に深く感謝します。また、「大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM」は、大阪樟蔭女子大学日本語研究センターにおいて、同センター所蔵のものをらせていただきました。あわせて記し、感謝の意を表します。